須磨海浜水族園 亀ちゃんの

あっぱれ！氷の動物たち

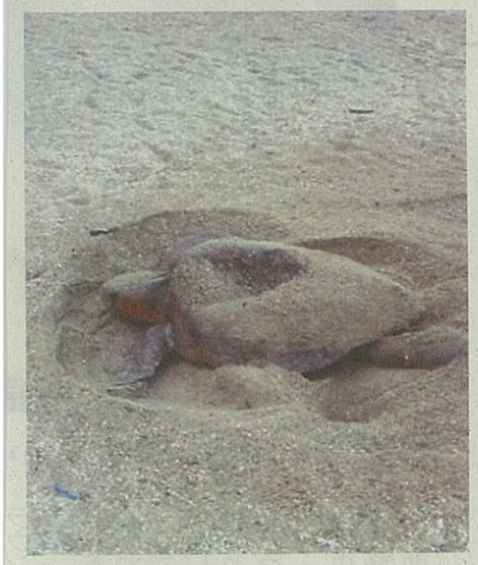
アカウミガメ 久々に明石で産卵

場所選びは柔軟に

忘れたころにやってくるとはこのことだろう。この6月15日の夜、産卵にやってきた明石のアカウミガメである。兵庫県明石市の海岸では、数年に1度、アカウミガメが産卵に上陸する。今年の産卵は何と6年ぶりのことである。ウミガメが産卵すると必ず出るのが、ウミガメは生まれた砂浜に戻って来て産卵するのかという質問である。

生まれた場所に戻って産卵する動物としては、サケが有名だ。北海道など北日本の川には毎年秋になるとシロザケが産卵に帰ってくる。サケの母川回帰については研究が進んでおり、ほぼ間違いなく生まれた川に戻ってくるという。そのメカニズムも随分明らかになり、太陽の位置や地磁気によって河口付近の海に戻って来て、最終的には川のにおいで生まれた川を識別すると言われている。簡単に言うと、サケは頭にカーナビを搭載しているのである。

㊤正確に母川回帰をするシロザケ＝北海道千歳市の千歳サケのふるさと館で㊦川を上り産卵を終えたあと死んだシロザケ＝北海道の忠類川で、いずれも筆者撮影



㊤明石の海岸で産卵するアカウミガメ＝2005年市民撮影㊦同年に明石で孵化したアカウミガメ。今では甲長は70㌢に達している

成熟に長い年月 移りゆく砂浜

では、ウミガメはどうなのか？ これがよくわかっていない。北太平洋において、アカウミガメが産卵するのは本州から沖縄にかけての日本の砂浜しかない。従って、太平洋に広く分散しても、母ガメは日本に戻ってきて産卵することは明らかである。問題は生まれた砂浜で産卵するかである。確かに、DNAを用いて母浜回帰があるとした研究もあるにはあるが、私は否定的な見解を持っている。それは、生まれた砂浜に固執する必要がないからである。

サケは河口で自分の生まれ故郷だと認識すると、何日もかけて、体をボロボロにしながら、上流の産卵場まで旅をする。そこに失敗は許されない。苦労して川を上がってきて、そこはダメな場所だった、残念でしたというわけにはいかない。そこに、サケには河口で川を正確に識別する能力が要求される。ところが、カメにはそのような厳しさはない。砂浜に上陸しても、気に入らなければ、海に戻り別の砂浜を探して産卵すればいい。つまり、前回（6月21日付）紹介したように、子ガメを黒潮に乗せやすい砂浜ならば、別に生まれ故郷の砂浜にこだわる必要がないのである。

明石の卵を孵化まで見守る担当は、須磨海浜水族園に今年入ったウミガメ博士のI研究員である。彼の博士論文によると、アカウミガメが卵を産むようになるまで、早いものでは20年、遅いものでは60年もかかるそうだ。成熟するのに長い、長い年月が必要なのだ。それに対して砂浜はあまりにも変化しやすい。沖の海底で砂をとったり、近くで港を造ったりすると、砂浜は容易に消失してしまう。事実、各地を転々として育った私が、遊び場にしてきた大阪の浜寺海岸や大分の大在海岸は埋め立てられ存在しない。そんな変わりやすい砂浜を覚えるのはあまり意味がない。もっと融通を利かして産卵場を決めた方が得策だと思うのである。

ただ、ウミガメは一度産卵すると数年後、同じ砂浜で産卵する傾向は強い。女性は第2子を産むとき第1子を産んだ産院を選択することが多いことと同じだ。自画自賛で恐縮だが、須磨海浜水族園が偉いのは2005年に明石で生まれたカメを3匹飼育してきたことである。8月に子ガメが生まれれば、同じ母親から生まれたのかどうかがDNAである程度はわかるのである。明石の子ガメが孵るのはちょうどお盆の頃である。生まれ故郷に帰る人も多いのだろう。故郷に帰ると安心できる理由を、サケやウミガメたちは教えてくれているのかもしれない。

＝次回は8月16日

亀崎直樹（かめざき・なおき）

1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園学術研究統括。元園長。岡山理科大学生物地球学部教授。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。